The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	陳士元『夢占逸旨』内篇訳注（二）
Author(s)	清水，洋子
Citation	中国研究集刊. 2009, 48, p. 127-148
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61196
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　麗号（総四十八号）平成二十一年六月　一二七―一四八頁

陳士元『夢占逸旨』内篇訳注（二）

清水洋子

はじめに

本編は、陳士元『夢占逸旨』内篇訳注の第二稿である。前回、序文および真宰篇を対象とした「陳士元『夢占逸旨』内篇訳注（一）」（『中国研究集刊』生号（第四十七号）、大阪大学中国哲学学会、二〇〇八年）に続き、本編では、長柳篇および昼夜篇を訳注の対象とする。

凡例

・『夢占逸旨』の底本は、陳士元撰『帰雲別集』（道光十三年応城呉毓梅校刊同治十三年修補本）所収本（以下、「帰本」と称す）を使用し、呉省蘭輯『芸海珠塵』（民国五十七年台北芸文印書館景嘉慶中南匯呉氏聴彝堂刊本）所収本（以下、「芸本」と称す）を校本とする。

・本文には【原文】【書き下し文】【現代語訳】【語注】を付し、自注には【原文】【書き下し文】を付す。

・底本と校本との異同については、【原文】中の傍線部と丸数字とで示し、【校異】で詳細（校訂を要する場合など）を挙げる。

・旧字体や異体字は、必要な場合を除き新字体に改めた。

・文意の補足は〔　〕で、注記は（　）で示した。

・自注の引用文に出拠が明示されていない場合は、可能な限り補い、【書き下し文】の中で示した。

・自注の引用文には、陳の翻案あるいは誤引と思われるものもある。参考として、出拠の原文を本編末の注に付す。

長柳篇第二

【原文】

本文 長柳之演、載諸芸牒、其詳不可得聞矣①、

自注 漢書芸文志*、黄帝長柳占夢十一巻、甘徳長柳占夢二十巻、

【校異】

①芸本は、「矣」を「已」に作る。

＊芸本は、「漢書芸文志」の下に「曰」を付す。

【書き下し文】

本文 長柳の演は、諸を芸牒に載するも、其の詳は聞くを得べからず。

自注 『漢書』芸文志、黄帝長柳占夢十一巻。甘徳長柳占夢二十巻。(注1)

【現代語訳】

長柳〔占夢〕の技術は、〔その名が〕『漢書』に記録されているものの、その詳細については〔もはや〕聞くことができない。

【語注】

○黄帝長柳占夢十一巻……黄帝が占夢について記したとされる書物。「亡。『帝王世紀』曰、黄帝因夢求得風后・力牧、因著『占夢経』十一巻。」(『史記正義』五帝本紀)

○甘徳長柳占夢二十巻……古代の天文暦法家である甘徳が、占夢について記したとされる書物。『史記』天官書には、「昔之伝天数者」として「在斉甘公」と記されており、その『集解』が引く徐広注に「或曰、甘公、名徳也。本是魯人」とある。だが一方で、張守節『正義』には「『七録』云、楚人。戦国時、作『天文星占』八巻」とあるなど、その具体的な人物像などについては諸説ある。(注2)

【原文】

本文 周官太卜、掌三兆・三易・三夢之法、

自注 三兆、一玉兆、二瓦兆、三原兆、三易、一連山、二帰蔵、三周易、三夢①、一曰致夢、二曰觭夢、三曰咸陟、周礼注*、致夢、言夢之所至、夏后氏作焉、觭、得也、言夢之所得、殷人作焉、咸、皆也、陟亦得也、言夢之皆得、周人作焉、

【校異】

①芸本では、「三夢、一曰致夢、二曰觭夢、三曰咸陟」が本文であり、その自注として「周礼注……周人作焉」が引かれている。

＊芸本は、「周礼注」の下に「曰」を付す。

【書き下し文】

本文 周官太卜、三兆・三易・三夢の法を掌る。

自注 三兆、一に玉兆、二に瓦兆、三に原兆。三易、一に連山、二に帰蔵、三に周易。三夢、一に曰く致夢、二に曰く觭夢、三に曰く咸陟。（注3）

『周礼』〔春官・宗伯・大卜〕注、致夢、夢の至る所を言う。夏后氏作る。觭は、得なり。夢の得る所を言う。殷人作る。咸は、皆なり。陟もまた得なり。夢のみな得るを言う。周人作る。（注4）

【現代語訳】

周官では太卜の官（卜筮官長）が、三兆・三易・三夢という占験の法をつかさどっていた。

【語注】

○太卜……『周礼』に見える官名。『周礼』鄭玄注に「問亀曰卜。大卜、卜筮官之長」（春官・序官・大卜）とある。

○三兆……「兆」は、亀卜の際にできる割れ目（『詩経』小雅・小旻の孔穎達疏に「兆者、亀之亶坼」とある）。その割れ目によって吉凶を判断することから、占いの意味で用いられる。「三兆」は、玉兆・瓦兆・原兆という三種の卜形の総称。「玉」「瓦」「原」は、亀甲を焼いた時の割れ目が、それぞれ玉の割れ目、瓦の割れ目、高くて平らな場所にある田圃の割れ目と似ていることに由来する。（注5）○三易……連山・帰蔵・周易という三種の易の総称。○三夢……致夢・觭夢・咸陟という三種の夢占いの総称。鄭玄によれば、それぞれ夏・殷・周における占夢の名称であるという。ここでの「致」「觭」「陟」は、夢として得られる対象を意味する。（注4参照）

【原文】

本文 又以八命贊三兆・三易・三夢之占、以観吉凶、

自注 周礼、以邦事作八命、一曰征、二曰象、三曰与、四曰謀、五曰果、六曰至、七曰雨、八曰瘳、以八命、贊三兆・三易・三夢之占、以観国家之吉凶、以詔救政、註、国之大事有八、定作其詞、以命著亀、又参之以夢也、

【校異】

①帰本は、「雨」を「両」に作る。ここでは芸本、『周礼』ともに「雨」と作るのに従い改めた。

【書き下し文】

本文 又た八命を以て三兆・三易・三夢の占を賛け、以て吉凶を観る。

自注 『周礼』〔春官・宗伯・大卜〕、邦事を以て八命を作る。一に曰く征、二に曰く象、三に曰く与、四に曰く謀、五に曰く果、六に曰く至、七に曰く雨、八に曰く瘳。八命を以て、三兆・三易・三夢の占を賛けて、以て国家の吉凶を観、以て詔げて政を救う。(注6)

〔『周礼』春官・宗伯・大卜〕註、国の大事に八あり。定めて其の詞を作り、以て蓍亀に命ず。又た〔『周礼』春官・宗伯・大卜〕之に参するに夢を以てするなり。(注7)

【現代語訳】

また、〔征伐についての吉凶・天象についての吉凶・共に事をなすことについての可否・謀議についての是非・事が成就するかどうか・人が来るかどうか・雨が降るかどうか・病が癒えるかどうかなど、国家の大事として問う必要のある〕八種の命辞によって、三兆・三易・三夢の占事を補助し、吉凶をみる。

【語注】

○八命……八種の命辞。諸事に関する吉凶の判断を亀卜に命じる為政者の言葉。ただし、『夢占逸旨』本文では、「亀卜」の八命であることは明記されていない。○征……敵の征伐、もしくは各国を巡視することについて問う。「鄭司農云、征謂征伐人也。……玄謂、征亦云行巡守也。」(鄭玄注)、「征者、上伐下也。」(『孟子』尽心下) ○象……日食や月食、天体の運行について、その吉凶を占うこと。鄭玄注に「鄭司農云、……象謂災変雲物、如衆赤烏之属、有所象似。易曰、天垂象見吉凶。春秋伝曰、天事恒象、皆是也」とある。(注8) ○与……共に事を為すことの可否を問う。「鄭司農云、……与謂予人物也。……玄謂、……与謂所与共事也。」(鄭玄注) ○謀……物事の難易、または行政について問う。「謀謂謀議也。」(鄭司農注)、「咨事之難易為謀。」(『詩経』小雅・皇皇者華「周爰咨謀」毛伝)、「謀者、謀政事也。」(『詩経』周頌・訪落序「嗣王謀於廟也」鄭箋) ○果……事の成否を問う。鄭司農は「果謂事成与不也」とするが、鄭玄は果断な行

動を占うものと解釈し（「果謂以勇決為之」）、楚の司馬子魚による亀卜を例として挙げる。（「若呉伐楚。楚司馬子魚卜戦令亀曰、鮒也、以其属死之、楚師継之、尚大克之。吉、是也。」（注9）○至……人が来訪するかどうかを問う。鄭司農注に「至謂至不也」とある。○瘳……病が癒えるかどうかを問う。「瘳、疾瘉也。」（『説文解字』）○賛……たすける。補助する。「賛、助也。」（『礼記』中庸「可以賛天地之化育」鄭玄注）、「賛、佐也。」（『左伝』襄公二十七年「能賛大事」杜預注）

【原文】

本文　夫兆以①亀而徵、易頼蓍而顕、蓍亀外物也、聖人設教

自注　②利用、猶足以通乎神明、稽乎大疑、

易伝、聖人神道設教、

又曰、③利用出入、民咸用之、謂之神、

又曰、④以神明其徳、

洪範、汝則有大疑、謀及卜筮、

【校異】

①芸本は、「以」を「倚」に作る。

②芸本は、「易大伝曰、聖人以神道設教」とする。

③芸本は、「以通神明之徳」とする。

④芸本は、「尚書洪範曰」とする。

【書き下し文】

本文　夫れ兆は亀を以て徴し、易は蓍に頼りて顕らかなり。蓍亀は外物なるも、聖人教えを設け利用すれば、猶お以て神明に通じ、大疑を稽うるに足る。

自注　『易』伝〔観の彖伝〕、聖人は神道もて教えを設く。（注10）

又た曰く〔『易』繫辞伝上〕、利用出入して、民みな之を用いるは、之を神と謂う。（注11）

又た曰く〔『易』繫辞伝上〕、以て其の徳を神明にする。（注12）

〔『書経』〕洪範、汝則し大疑あらば、謀ト筮に及ぶ。（注13）

【現代語訳】

そもそも亀卜は、亀甲によって〔吉凶の〕きざしが示され、易占は、蓍によって〔吉凶の〕きざしが明らかになる。蓍や亀甲は外物であるが、聖人は教義を設けてそれらを利用することで神明に通じ、大きな疑問を考えることができる。

【語注】

○外物……外界の物事。ここでは、心身の内的作用により生ずる夢に対し、外界の物質として蓍亀が挙げられている。(注14)○聖人設教……『易』観の彖伝に、「観天之神道、而四時不忒。聖人以神道設教、而天下服矣」（聖人が一定した四時の循環を守る天道にのっとり政教を設けるため、天下の人々はそれに服する）とある。「神道」は、推しはかり難い神妙な道。上記「観天之神道」の王弼注に「神則無形者也」とあり、その孔穎達疏に「神道者、微妙無方、理不可知、目不可見、不知所以然而然、謂之神道」とある。○神明……神のように全てを見通せるほど聡明であること。また、神妙な奥深い領域。○稽乎大疑、謀及卜筮……事を行おうとする際に疑いの余地があれば、卜筮に問うてから決定する。『尚書』洪範の「洪範九疇」（治世における九つの大法）の一つ「稽疑（けいぎ）」に、疑義が生じた際は、卜筮に通じた人物を選んで取り立てるとある。「稽疑、択建立卜筮人、乃命卜筮。」（洪範）「考正疑事、当選択知卜筮人、建立之。」（孔伝）(注15)○利用出入……利益を享受できるよう、物事を便宜的に用いる。

【原文】

本文　乃若夢本魂渉、非由外仮、度其端倪、探其隠賾、則栄枯得喪、烏得而違諸、

自注　蓍亀外物、尚可以占①②栄枯得喪、而夢則発乎精神、非外物、比尤可占也、占有不応者、則不能度其端倪、探其隠賾爾、

【校異】

①芸本は、「占」の下に「其」を置く。
②芸本は、「占」の上に「其」を置く。

【書き下し文】

本文　乃ち夢の若きは魂の渉るに本づき、外由り仮るに非ず。其の端倪を度り、其の隠賾を探せば、則ち栄枯得喪、烏くんぞ得て諸に違わん。

自注　蓍亀は外物なれども、尚お以て栄枯得喪を占うべし。而るに夢は則ち精神より発れ、外物に非ざれば、比して尤も占うべきなり。占うも応ぜざる者あるは、則ち其の端倪を度り、其の隠賾を探ること能わざるのみ。

【現代語訳】

本文 ましてや夢というものは、魂があちらこちらへ渉りゆくことによって生じるもので、外界から借りたものではない。夢の〔意味を明らかにするための〕端緒を推しはかり、夢に隠された奥深い妙理を探れば、栄達や零落、利得や損失は、どうして〔予知して〕違うことができようか。

自注 〔陳士元による論説が主な内容であるため訳出〕著（めどき）や亀甲は外物であるが、それでもなお、栄達や零落、利得や損失について占うことができる。ましてや夢は、〔人間の内的な領域にある〕精神より発生するものであって、外物ではないのだから、〔著亀による卜筮に〕比べても、優先的に占うべきものだ。〔夢を〕占ったものの、応験がなかったのなら、それは〔夢を占うこと自体が誤っているのではなく、占者が〕夢の端緒を推しはかり、夢に隠された奥深い妙理を探りあてることができなかったからに過ぎない。

【語注】

○度……推しはかって考える。「爰究爰度」（『詩経』大雅・皇矣）の鄭箋に「度亦謀也」とある。○端倪……物事の起こる端緒。始まりのきざし。「端」は、物事のはし、いとぐち。「倪」は、きわ、はし。『荘子』大宗師篇に「反覆終始、不知端倪」とあり、その成玄英疏に「端、緒也。倪、畔（田の境界。際（きわ）、果て）也。反覆、猶往来也。終始、猶生死也。……故能去来生死、与化俱往。化又無極、故莫知端倪」とある。○隠賾……賾隠とも。隠れていて奥深いこと、道理。『易』繫辞伝上に「探賾索隠」とあり、その孔穎達疏に「賾謂幽深難見」とある。

昼夜篇第三

【原文】

本文 昼夜一息也、古今一昼夜也、

自注 易①、通昼夜之道而知、
荘子、死生為昼夜、*
顔之推曰、千載一聖、猶旦暮也、

【校異】

①芸本には、「易大伝曰、通乎昼夜之道而知」とある。
＊芸本は、「荘子」の下に「曰」を付す。

【書き下し文】

本文 昼夜は一息なり。古今は一昼夜なり。

自注 『易』〔繫辞伝上〕、昼夜の道を通じて知る。(注16)

『荘子』〔至楽〕死生は昼夜たり。(注17)

顔之推〔『顔氏家訓』慕賢〕曰く、千載に一聖、猶お旦暮のごときなり。(注18)

【現代語訳】

昼夜〔が交代してめぐる一日の時間〕は、一呼吸の間〔のように短いもの〕である。古今〔という長い時間の流れ〕も、昼夜の一巡り〔のように短いもの〕である。

【語注】

○一息……しばらく、暫時。一呼吸するほどの短い時間。

○昼夜之道……昼夜と同様、交互にめぐる万物生滅の移り変わり、また造化の働き。(注17参照) ○千載一聖……千年に一度、聖人が現れること。

【原文】

本文 天地以春夏為昼、秋冬為夜、治世為昼、乱世為夜、

自注 春夏闢戸、誠之通、秋冬闔戸、誠之復、治世①陽明、乱世陰濁、有昼夜之象、

荘子、*天有春夏秋冬昼②夜之期、

【校異】

①帰本は「世治」とする。ここでは芸本に従い「治世」に改めた。

②芸本は、「旦暮」とする。

＊芸本は、「荘子」の下に「曰」を付す。

【書き下し文】

本文 天地は春夏を以て昼となし、秋冬もて夜となし、治世もて昼となし、乱世もて夜となす。

自注 春夏に戸を闢(ひら)くは、誠の通うなり。秋冬に戸を闔(とざ)すは、誠の復(かえ)るなり。治世の陽明、乱世の陰濁は、昼夜の象あり。

『荘子』〔列禦寇〕、天に春夏秋冬昼夜の期あり。(注19)

【現代語訳】

天地は春と夏を昼とし、秋と冬を夜とし、治世を昼とし、乱世を夜とする。〔春夏と秋冬、治世と乱世は、昼と夜とがそうであるように、移り変わりながら変化する。〕

【語注】

○春夏闢戸……「闢戸」は、扉を開くこと。「闢、開也。」（『説文解字』）、『易』繫辞伝上の「闢戸謂之乾」は、乾の働きによる万物の生育を、扉が外に向かって開くことになぞらえたもの（注20）。季節で言えば、春と夏とがその時期にあたる。○秋冬闔戸……「闔戸」は、扉を閉じること。『易』繫辞伝上の「闔戸謂之坤」は、坤の働きによって万物が収蔵される静かな状態を、扉が閉じていることになぞらえたもの（注21）。季節で言えば、秋と冬とがその時期にあたる。また、「一闔一闢謂之変」（『易』繫辞伝上）とあるように、「闢戸」「闔戸」は、扉が交互に開閉するように陰陽が往来変化するとの意味で用いられる。（注22）○誠之通・誠之復……「誠者、真実無妄之謂、天理之本然也。」（『中庸章句』第二十章「誠者天之道」朱注）、「天下之物、皆実理之所為、故必得是理、然後有是物。」（『中庸章句』第二十五章「誠者物之終始、不誠無物」朱注）（注23）「誠」は、季節の変化、天体の運行、万物の生成として発現する自然そのものの働きを言う。「誠之通」は、造化のおおもとが万物を生育すること、「誠之復」は、万物が造化のおおもとに帰ること。「元始・亨通・利遂・貞正、乾之四徳也。通者、方出而賦於物、善之継也。復者、各得而蔵於己、性之成也。」（周敦頤『通書』誠上第一「元亨、誠之通。利貞、誠之復」朱注）（注24）○昼夜之象……昼と夜とが交互に移り変わる様子。総じて、陰陽・剛柔・昼夜が示すような、循環変化のさま。『易』繫辞伝上に「剛柔相推而生変化。……剛柔者、昼夜之象也」とあるのは、剛柔が昼夜のように相対し、また交互に循環して変化を生むものの象徴であることを言う。

【原文】

本文　天地有禨祥、皆其精神所発、

自注　漢天文志*、陰陽之精、其本在地、而上発於天、

【校異】

＊芸本は、「漢天文志」の下に「曰」を付す。

【書き下し文】

本文　天地に禨祥（きしょう）あり。みな其の精神の発（あらわ）るる所なり。

自注　『漢〔書〕』天文志、陰陽の精、其の本は地に在り、而して上りて天に発（あらわ）る。（注25）

【現代語訳】

天地には、吉凶禍福のきざしとなるもの（様々な天象）

がある。これらはみな、精神（天地の本質としての陰陽）が発現したものである。

【語注】

○禨祥……吉凶、またそのきざし。「是故因鬼神禨祥而為之立禁。」（『淮南子』氾論訓）「禨祥、吉凶也。」（高誘注）

○精神……天地における陰陽の精気。以下、本文では、天地の精気が、吉兆・凶兆となる様々な天象として発現することを述べている。自注に「陰陽之精、其本在地、而上発於天」とあるのを参照。

【原文】

本文　凡景星・卿雲・器車・醴泉之類、称為禎瑞者、天地之吉夢也、

自注　孫氏瑞応図*、景星、状如半月、王者不敢私人則見、史記*、郁郁紛紛、蕭索輪囷、是為卿①雲、孝経援神契*、天子孝、則景雲出游、白虎通*、王者徳及山陵、則景雲浮、器車出、徳及淵泉、則醴泉湧、

【校異】

①芸本は、「卿」を「慶」に作る。（注26）

＊芸本は、「孫氏瑞応図」「史記」「孝経援神契」「白虎通」の下に、それぞれ「曰」を付す。

【書き下し文】

本文　凡そ景星・卿雲・器車・醴泉の類をば、称して禎瑞となすは、天地の吉夢なればなり。

自注　『孫氏瑞応図』、景星とは、状半月の如し。王者敢えて人に私せざれば則ち見る。（注27）

『史記』〔天官書〕、郁郁紛紛、蕭索輪囷たるは、是れ卿雲たり。（注28）

『孝経援神契』、天子孝なれば、則ち景雲出游す。（注29）

『白虎通』〔封禅〕、王者の徳 山陵に及べば、則ち景雲浮かび、器車出づ。徳 淵泉に及べば、則ち醴泉湧く。（注30）

【現代語訳】

およそ、景星・卿雲・器車・醴泉の類を吉祥と言うのは、それらが天地の吉夢だからである。

【語注】

○景星……吉事を告げる大きな星。瑞星。「景星者、徳星

也。其状無常、常出於有道之国。」（『漢書』天官書）、「景、大也。」（『爾雅』釈詁）○卿雲……瑞雲。慶雲。盛り上がり曲がりくねったような形状の美しい雲。○器車……瑞応となる器物と車。「器、謂若銀甕丹甑也」（『礼記』礼運「山出器車、河出馬図」鄭玄注）のように、珍奇な甕や甑であったり、「按『礼緯斗威儀』云、其政太平、山車垂鉤。注云、山車自然之車。垂鉤不揉治而自円曲」（孔穎達疏）とあるように、自然の造化の中で木がおのずと車の形を成したものを言う。○醴泉……醴のような甘みのある泉で、瑞祥の一つとされる。甘泉。「甘雨時降、万物以嘉。謂之醴泉。」（『爾雅』釈天）「醴泉者、水泉味甘如醴也。」（邢昺疏）○禎瑞……吉をあらわすしるし。「禎、祥也。」（『説文解字』）また、『礼記』中庸篇に「必有禎祥」とあり、その孔穎達疏に「禎祥、吉之萌兆」とある。○孫氏瑞応図……孫柔之（不詳）撰。様々な瑞応について記す。○半月……半分に欠けた月。弦月。○郁郁紛紛……美しく盛んなさま。「紛郁郁其難詳。」（『文選』張衡「南都賦」）「〔張〕銑曰、……郁郁、衆美貌。」（六臣註）（注31）、「羽旄紛。」（『漢書』礼楽志）「紛紛、言其多。」（顔師古注）○蕭索……めぐり纏うさま。「其為状也、散漫交錯、氛氳蕭索。」（『文選』謝霊運「雪賦」）「〔呂延〕済曰、皆飄流往来繁密之貌。」（六臣註）○輪囷……曲がりくねるさま。「囷」は丸いこと。「不稼不穡、胡取禾三百囷兮。」（『詩経』魏風・伐檀）「円者為囷。」（毛伝）

【原文】

本文　祅星・霾霧・崩竭・夷羊之類、称為妖孽者、天地之悪夢也、

自注　晋灼云、妖①星彗孛之属、
毛詩邶詩箋、霾雨土②也、
五音篇海*、霧不祥気也、
礼緯曰、山崩川竭、亡国之徴、
淮南子*、夷羊在牧、注*、夷羊土神、殷之将亡、夷羊見於郊、

【校異】

①芸本は、「妖」を「祅」に作る。
②芸本は、「土」を「士」に作る。
＊芸本は、「五音篇海」「淮南子」の下にそれぞれ「曰」を付し、「注」の下に「云」を付す。

【書き下し文】

本文　祅星・霾霧・崩竭・夷羊の類をば、称して妖孽と

なすは、天地の悪夢なればなり。

自注 晋灼〔『漢書』天文志注〕云えらく、妖星は彗孛（すいはい）の属なり。（注32）

毛詩邶詩〔邶風・終風〕箋、霾（ばい）は土雨（ふ）るなり。（注33）

『五音篇海』、霘（ふん）は不祥の気なり。（注34）

礼緯に曰く、山崩れ川竭くは、亡国の徴なり。（注35）

『淮南子』〔本経訓〕、夷羊牧にあり。〔高誘〕注、夷羊は土神なり。殷の将に亡びんとするや、夷羊郊に見（あらわ）る。（注36）

【現代語訳】

祆星・霾霘・崩竭・夷羊の類を災いのきざしと言うのは、それらが天地における悪夢だからである。

【語注】○祆星……凶星。○霾霘……「霾」は、風が吹いて、土砂が雨のように天から降ってくること。（注34参照）○崩竭……山が崩れ川の水が尽きること。○夷羊……山奥に棲息する鹿の類。『逸周書』度邑解に「夷羊在牧、飛鴻過野」とある。また、『史記』周本紀には「麋鹿在牧、蜚鴻満野」とあり、その『集解』に「徐広曰、此事出周書及随巣子、云『夷羊在牧』。牧、郊也。夷羊、怪物也」とある。「麋（び）」は大鹿のこと。『礼記』月令に「芸始生、……麋角解」とあり、その孔穎達疏に「麋角解者、説者多、家皆無明。拠熊氏云、鹿是山獣。夏至得陰気而解角。麋是沢獣、故冬至得陽気而解角」とある。また、「夷羊（麋鹿）」が凶兆とされることについては『左伝』に記述が見える。（荘公十七年経「冬、多麋」杜預注「麋多則害五稼、故以災書」を参照。）○妖孽……災いのきざし。「国家将亡、必有妖孽」（『礼記』中庸）の孔穎達疏に、「妖孽謂凶悪之萌兆也。妖、猶傷也。傷甚曰孽、謂悪物来為妖傷之微」とある。○彗孛……彗星。ほうきぼし。

【原文】

本文 吉悪二夢、天地可占、而況於人乎、人為形役、興寝有常、覚而興、形之動也、寝而寐、形之静也、而神気游衍、則造化同流、

自注 荘子、*人与天地精神往来、

淮南子、*肺主目、腎主鼻、胆主口、肝主耳、外為表而内為裏、開閉・張翕①、各有経紀、故頭円象天、足方象地、天有四時・五行・九解・三百六十六日、人亦有四肢②・五臓・九竅・三百六十六節、天有風雨寒暑、人亦有取与喜怒、与天地参也、

是故審生死③之分、別同異之迹、以反其性命之宗、所

以養愛其精神、撫養①其魂魄也、
説苑、*心応棘、肝応楡、我通天地、将陰夢水、将晴夢火、天地通我、

【校異】

①芸本は、「翕」を「歙」に作る。
②芸本は、「肢」を「支」に作る。
③芸本は、「生死之分」を「死生之分」に作る。
④芸本は、「養」を「静」に作る。
＊芸本は、「荘子」「淮南子」「説苑」の下に、それぞれ「曰」を付す。

【書き下し文】

本文 吉悪の二夢は、天地をも占うべし。而るに況んや人においてをや。人の形役たるは、興寝に常あり。覚めて興くるは、形の動なり。寝ねて寐ぬるは、形の静なり。而るに神気の游衍するは、則ち造化同流すればなり。

自注 『荘子』〔天下〕、人と天地とは精神往来す。(注37)
『淮南子』〔精神訓〕、肺は目を主り、腎は鼻を主り、胆は口を主り、肝は耳を主る。外を表と為して内を裏と為す。開閉・張翕は、各おの経紀あり。故に頭の円なるは天に象り、足の方なるは地に象る。天に四時・五行・九解・三百六十六日ありて、人もまた四肢・五臓・九竅・三百六十六節あり。天に風雨寒暑ありて、人もまた取与喜怒あるは、天地と参ずればなり。(注38)
〔『淮南子』要略〕是の故に生死の分を審らかにし、同異の迹を別ち、以て其の性命の宗に反るは、其の精神を養愛し、其の魂魄を撫養する所以なり。(注39)
『説苑』、心は棘に応じ、肝は楡に応じ、我は天地に通ず。将に陰ならんとすれば水を夢みて、将に晴れんとすれば火を夢みる。天地は我と通ず。(注40)

【現代語訳】

吉夢と悪夢の二つは、天地さえも占うことができるのだから、人間〔を占えること〕は、言うまでもない。人間の身体というものは、起きて活動することと眠りにつくことに〔以下のような〕一定のきまりがある。〔すなわち〕目覚めて起きるのは、身体が活動している状態である。体を横にして眠りにつくのは、身体が安静な状態である。ところが、〔横になって眠っていても〕精神が自由に動き回るのは、それが造化という自然における変化の営みと流れを同じくしているためである。

【語注】
○游衍……自由に動き回ること。『詩経』大雅・板「及爾游衍」の毛伝に「游、行。衍、溢也」とあり、その孔穎達疏に「亦自恣之意也」とある。○張翕……広げることと閉じること。伸縮。「張、開也。翕、斂也。」（『荘子』山木「有一人在其上、則呼張翕」『釈文』）○経紀……すじみち。○九解……八方の分野と中央。「一説、八方中央。故曰九解。」（高誘注）○九竅……人体にある九つの穴。

【原文】
本文 帰乎至虚、蘊乎至霊、熒魂不枯、精莩不沈、
自注 楊子、*熒魂曠枯、精莩曠沈、
柳宗元注、*熒魂司目之用者也、莩目精①之表也、
呉秘注、*熒魂精光也、精莩精之白也、

【校異】
①芸本は、「精」を「睛」に作る。
＊芸本は、「楊子」の下に「曰」を付し、「柳宗元注」「呉秘注」の下にそれぞれ「云」を付す。

【書き下し文】
本文 至虚に帰り、至霊に蘊れば、熒魂は枯れず、精莩は沈まず。
自注 楊子〔『法言』修身〕、熒魂は曠枯し、精莩は曠沈す。（注41）
柳宗元注、熒魂は目の用を司るものなり。莩は目精の表なり。（注42）
呉秘注、熒魂は精光なり。精莩は精の白なり。（注43）

【現代語訳】
〔精神が〕至虚へと帰り、至霊におさまれば、〔目の働きを司る〕視覚は枯れ衰えることもなく、ひとみは落ちくぼんでしまうこともない。〔このように、視覚が機能する覚醒時は、精神が活動している。〕

【語注】
○至虚……極めて静かな虚無の領域。○蘊……蓄える、収蔵する。「蘊匱古今、博物多聞。」（『後漢書』周栄伝）「蘊、蔵也。」（范曄注）○至霊……極めて霊妙な領域。○熒魂・精孚……この二語については諸説ある。本節における「熒魂」は、視覚を司る魂（精神）の性質を示す言葉。「熒」は明るいこと。「精孚」は、知覚器官である

ひとみ（光を感知する角膜や瞳孔など、眼球の表面部分）のこと。「孚」は軽くて薄いこと。（注42参照）なお、魂と視覚との関連については、真宰篇に「人 昼に興くれば、魂 目に麗く。……魂 目に麗く、故に能く見る」とある。本節は、「熒魂」「精孚」の語を用い、魂の状態が視覚機能の状態を左右することを述べたもの。また、魂は昼間に視覚として機能するほか、夜間には夢見の現象をもたらすとされている。（『荘子』斉物論「其寐也魂交」、『列子』周穆王「神遇為夢」）このことから、昼夜を通して活動しうる魂の動静は、身体のそれと必ずしも一致するものではないと言える。（次節参照）○楊子……前漢の揚雄。字は子雲。蜀郡成都の人。辞賦に優れる一方で、儒教宣揚のために『法言』『太玄』を著した。○曠枯……むなしく枯れてしまうこと。「曠、空也、廃也。」（『漢書』賈山伝「曠日十年」顔師古注）○曠沈……むなしくなくなってしまうこと。○精光……明るい光。「精、明也。」（『史記』天官書「天精而見景星」『集解』引孟康注）

【原文】

本文 豈与寝興覚寐為動静哉、故形雖寐而神弗寐、或斂於寂、或通於触、神有触斂、則寐有夢否、

自注 神触於形、然後有夢、無触則雖寐而不夢、荘子、成然夢①、蘧然覚、

朱子語類曰②、夫子、寤寐者、心之動静也、有思無思者、又動中之動静也、有夢無夢者、又静中之動静也、但寤陽而寐陰、寤清而寐濁、寤有主而寐無主、故寂然感通之妙、必於寤而言之、

【校異】

①芸本は、「夢」を「寐」に作る。

②芸本は、「曰夫子」を「朱子曰」に作る。

【書き下し文】

本文 豈に寝興・覚寐とともに動静をなさんや。故に形は寐ぬると雖も神は寐ねず、或いは寂において斂め、或いは触において通ず。神に触と斂とあれば、則ち寐ねて夢みると否とあり。

自注 神 形に触れ、然る後に夢あり。触るることなければ則ち寐ぬると雖も夢みず。

『荘子』〔徳充符〕、成然として夢みて、蘧然として覚む。（注44）

『朱子語類』〔拾遺〕曰く、夫子、寤寐は、心の動静なり。思うあると思うなきとは、又た動中の動静

なり。夢みることあり夢みることなきは、又た静中の動静なり。但だ寤は陽にして寐は陰、寤は清にして寐は濁、寤は主ありて寐は主なし。故に寂然感通の妙は、必ず寤において之を言う。(注45)

【現代語訳】

どうして寝興や覚寐〔という身体の活動・静止〕に合わせて〔精神も〕活動・静止するということがあろうか。〔身体と精神の動静は、必ずしも一致しないのである。〕だから、身体は寝ていても精神は寝ておらず、静かにおさまっていることもあれば、何かに触れていることもある。〔このように、身体が寝ている静かな状態でも、〕精神は〔何かに〕触れて動いたり静かにおさまったりすることがあるので、寝ていても夢を見たり見なかったりするのである。

【語注】

○成然……心安らかなさま。「間放之貌。」(『荘子』成玄英疏)○蘧然……はっと驚くさま。「驚喜之貌。」(『荘子』成玄英疏)○寤陽而寐陰、寤清而寐濁、寤有主而寐無主、故寂然感通之妙、必於寤而言之……「主」は一身の主宰者である「心」のこと。「寂然」は「心」の本体、「感通」は「心」の作用を言う。(注46)「心」が、その作用として発動する「感通」とは、万物の生育や活動の妙を、覚醒時に知覚すること。(注47)

【原文】

本文 神之所触、或逞、或邇、或永、或暫、晴晦異象、躋堕異態、栄辱異境、勝負異持、凡禎祥妖孽之類、紛杳而莫之綜核、雖畴昔所未嘗睹聞者、亦皆凝会於夢、此其一寐之所得吉悪、可従而占也、曾何分於昼夜、

自注 孔子曰、死生存亡、窮達貧富、賢与不肖、毀誉、饑渇、寒暑、是事之変、命之行也、日夜、相代乎前、故夢亦猶是、

【書き下し文】

本文 神の触るるところ、或いは逞く、或いは邇く、或いは永く、或いは暫し。晴晦は象を異にし、躋堕は態を異にし、栄辱は境を異にし、勝負は持を異にす。凡そ禎祥妖孽の類は、紛杳にして之を綜核するなし。畴昔未だ嘗て睹聞せざるところと雖も、またみな夢に凝会す。此れ其の一寐の得るところの吉悪は、従りて占うべきなり。曾ち何ぞ昼夜を分けん。

自注 「〔『荘子』徳充符〕孔子曰く、死生存亡、窮達貧富、賢と不肖、毀誉、饑渇、寒暑は、是れ事の変、命の行なり。日夜、前に相い代わる、と。」故に夢もまた猶お是くのごとし。(注48)

【現代語訳】

精神が触れるのは、〔空間的に〕遠いところのもの、近いところのもの、〔時間的に〕遥かなところのもの、近い〔直近の〕ところのものである。晴れと曇りとは天象の違いであり、上昇と下降とは動作の違いであり、栄誉と恥辱とは巡り合わせの違いであり、勝利と敗退とは〔それぞれの〕持ち前の違いである。およそ吉祥や災いのしるしといった類は、入り乱れていてはっきりとは分からず、すっきりとまとめることはできない。以前にまったく見聞きしたことのないものでも、みな夢の中に集まってくる。一眠りして得た〔夢の〕吉凶は、〔どれも〕占うことができる。どうして昼だとか夜だとかの区別をしようか。

【語注】

○逞……遠い。「逞、遠也。」(『説文解字』) ○邇……近い。「父母孔邇」(『詩経』周南・汝墳) の毛伝に「邇、近也」とある。○永……久しい。○暫……わずかな時間。「暫、不久也。」(『説文解字』) ○晴晦……空が晴れることと曇ること。「晦」は風雨による雲で空が暗くなること。「晦、昏也。」(『詩経』鄭風・風雨「風雨如晦」毛伝) ○躋堕……上昇と下降。「躋、升也。」(『詩経』小雅・斯干「君子攸躋」毛伝) ○紛杳……「上天之綷、沓旭卉兮。」(『文選』揚雄「甘泉賦」) 「善曰、杳、深遠也。」(六臣注) ○綜核……物事を調べまとめて明らかにする。「私願偕黄髪、逍遥綜琴書。」(『文選』何邵「贈張華詩」) 「善曰、……王肅『周易』注曰、綜、理事也。」(六臣注) ○疇昔……以前。むかし。「疇」は発語の辞。「予疇昔之夜、夢坐奠於両楹之間。」(『礼記』檀弓上) 「疇、発声也。昔、猶前也。」(鄭玄注) (注49) ○凝会……かたまりあつまる。○是事之変、命之行也、日夜相代乎前……死生や存亡、窮達や貧富などは、どれも人間世界において生じる現象の変化、運命の流れであり、日夜代わる代わる目の前に現れるものである。(注50) この記述を受けた「故に夢もまた猶お是くのごとし」という陳士元の言葉は、夢が、常に止むことのない吉凶の変化の中から発現するものであって、昼夜とは関係のないことを言うものと考えられる。

訳者注

（1）「黄帝長柳占夢十一巻。甘徳長柳占夢二十巻。」（『漢書』芸文志）

（2）また、黄帝や甘徳の名を冠した占夢書の存在は、両者と夢とが密接な関係を持つものと考えられていたことを示唆する。黄帝に関しては、『列子』周穆王篇に「欲弁覚夢、唯黄帝孔丘」とあり、夢を深く理解する聖人として黄帝の名を挙げている。また、占夢は天体の運行とも深く関わるとされていることから（『周礼』春官・宗伯・占夢に「占夢、掌其歳時、観天地之会、弁陰陽之気、以日月星辰占六夢之吉凶」とある）、天文家である甘徳も占夢にゆかりのある人物として考えられたと思われる。

（3）「大卜、掌三兆之法。一曰玉兆、二曰瓦兆、三曰原兆、其経兆之体、皆百有二十、其頌皆千有二百。掌三易之法、一曰連山、二曰帰蔵、三曰周易、其経卦皆八、其別皆六十有四。掌三夢之法、一曰致夢、二曰觭夢、三曰咸陟、其経運十、其別九十。」（『周礼』春官・宗伯・大卜）

（4）「致夢、言夢之所至。夏后氏作焉。咸、皆也。陟之言得也。読如王徳翟人之徳。言夢之皆得。周人作焉。杜子春云、觭、読為奇偉之奇。其字当直為奇。玄謂、觭読如諸戎掎之掎。掎亦得也。亦言夢之所得。殷人作焉。」（『周礼』春官・宗伯・大卜「掌三夢之法」鄭玄注）「王徳翟人」は、『左伝』僖公二十四年伝に見える。その孔穎達疏に「其の恩を荷（にな）うは、之を徳を為すと謂う」とあり、「徳」は恵みを享受することとされている。「諸戎掎」は『左伝』襄公十四年に見える。その杜預注に「其の足を掎（ひ）くなり（足を引っ張ってとらえること）」とある。上記の注では、「徳」「掎」ともに、広く「得る」の意として理解されている。

（5）『左伝』僖公二十八年伝「原田毎毎」の杜預注に「高平曰原」とある。また恵棟『九経古義』巻八に、「高卯之田、坼如亀文、故曰原田。兆之璺罅有似高卯之田、故曰原兆」とある。

（6）「以邦事作亀之八命。一曰征、二曰象、三曰与、四曰謀、五曰果、六曰至、七曰雨、八曰瘳。以八命者贊三兆・三易・三夢之占、以観国家之吉凶、以詔救政。」（『周礼』春官・宗伯・大卜）

（7）「国之大事待蓍亀而決者有八。定作其辞於将卜以命亀也。」（『周礼』春官・宗伯・大卜「以邦事作亀之八命」鄭玄注）、「以此八事命卜筮蓍亀、参之以夢。」（『周礼』春官・宗伯・大卜「以八命者贊三兆・三易・三夢之占」鄭司農注）

（8）『易』の引用は、「天垂象見吉凶」（繫辞伝上）による。「春秋伝」の引用は、「天事恒象」（『左伝』昭公十七年）により、その杜預注に「天道恒以象類告示人」とある。

（9）『左伝』昭公十七年伝に、「呉伐楚、陽匄為令尹、卜戦不

吉。司馬子魚曰、我得上流、何故不吉。且楚故、司馬令龜、我請改卜。令曰、魴也、以其属死之、楚師継之、尚大克之。吉。戦于長岸、子魚先死、楚師継之、大敗呉師、獲其乗舟余皇」とある。

(10)「大観在上、順而巽、中正以観天下。観、盥而不薦、有孚顒若、下観而化也。観天之神道、而四時不忒、聖人以神道設教、而天下服矣。」(『易』観・彖伝)

(11)「聖人以此洗心、退蔵於密、吉凶与民同患。神以知来、知以蔵往、其孰能与此哉。古之聡明叡知、神武而不殺者夫。是以明於天之道、而察於民之故、是興神物以前民用。聖人以此斉戒、以神明其徳夫。是故闔戸謂之坤、闢戸謂之乾。一闔一闢謂之変、往来不窮謂之通。見乃謂之象、形乃謂之器。制而用之謂之法、利用出入、民咸用之謂之神。」(『易』繫辞伝上)

(12)(注11)を参照。

(13)「七、稽疑。択建立卜筮人、乃命卜筮、曰雨、曰霽、曰蒙、曰駅、曰克、曰貞、曰悔。凡七、卜五、占用二、衍忒。立時人作卜筮、三人占、則従二人之言。汝則有大疑、謀及乃心、謀及卿士、謀及庶人、謀及卜筮。」(『尚書』洪範)

(14) しかし、一方では「蓍亀」が「神物」とされる場合もある。「是以明於天之道、而察於民之故、是興神物、以前民用。」(『易』繫辞伝上)、「天生蓍亀、聖人法則之、以為卜筮也。」(『易』繫辞伝上「天生神物、聖人則之」韓康伯注)

(15)『夢占逸旨』の自注では、疑義が発生すれば即刻卜筮を執り行うとあるが、これは必ずしも忠実な引用ではない。疑義が生じた場合、本来ならば、まず為政者自身が熟慮し、更に卿士(大夫、士も含む。『尚書』孔疏及び疏引鄭玄注を参照。)及び民衆に問う。卜筮は、為政者を始めとする人間の考えだけでは定めがたいとなった時に初めて執り行われる。(注13)を参照。

(16)「精気為物、遊魂為変、是故知鬼神之情状、与天地相似、故不違。知周乎万物而道済天下、故不過。旁行而不流、楽天知命、故不憂。安土敦乎仁、故能愛。範囲天地之化而不過、曲成万物而不遺、通乎昼夜之道而知。故神無方而易無体。」(『易』繫辞伝上)

(17)「生者、仮借也。仮之而生生者、塵垢也。死生為昼夜。」(『荘子』至楽)

(18)「古人云、千載一聖、猶旦暮也。五百年一賢、猶比髆也。言聖賢之難得、疏闊如此。」(『顔子家訓』慕賢)以下、『顔子家訓』については、王利器撰『顔氏家訓集解』(増補本)(中華書局、一九九三年)を用いる。

(19)「孔子曰、凡人心険於山川、難於知天、天猶有春秋冬夏旦暮之期、人者厚貌深情。」(『荘子』列禦寇)

(20)「闔戸謂之乾。」(『易』繫辞伝上)「乾道施生。」(韓康伯注)

「闢戸謂吐生万物也。若室之開闢其戸。」（孔穎達疏）

(21)「闔戸謂之坤。」（『易』繫辞伝上）「坤道包物。」（韓康伯注）

「闔戸謂閉蔵万物。若室之閉闔其戸。」（孔穎達疏）

(22)「一闔一闢謂之変者、開閉相循陰陽遞至、或陽変為陰、或開而更閉、或陰変為陽、或閉而還開、是謂之変也。」（孔穎達疏）その他、「動而静、静而動、闢闔往来、更無休息。……動静如昼夜、陰陽如東西南北、分従方去。」（『朱子語類』巻九四）、「問、陰陽動静以大体言、則春夏是動、属陽。秋冬是静、属陰。就一日言之、昼陽而動、夜陰而静。」（『朱子語類』巻九四）

(23)『中庸章句』については、以下『四書章句』（中華書局、一九九六年）を用いる。

(24)『通書』については、以下、理学叢書『周敦頤集』（中華書局、一九九〇年）所収のものを用いる。また、「誠之通」「誠之復」については、朱子と弟子の間でも次のように議論されている。

「正淳問、利貞者性情。曰、此是与元亨相対説。性情如言本体。元亨是発用処、利貞是収斂帰本体処。体却在下、用却在上。蓋春便生、夏便長茂條達、秋便有箇收斂撮聚意思、直到冬方成。……通書曰、元亨誠之通、利貞誠之復。通即発用、復即本体也。」（『朱子語類』巻六九）

「問、元亨誠之通、利貞誠之復。元亨是春夏、利貞是秋冬。秋冬生気既散、何以謂之收斂。曰、其気已散、收斂者乃其理耳。曰、冬間地下気暖、便也是気收斂在内。曰、上面気自散了、下面暖底乃自是生来、却不是已散之気復為生気也。」（『朱子語類』巻九四）

「問、通復二字。先生謂、誠之通、是造化流行、未有成立之初、所謂継之者善。誠之復、是万物已得此理、而皆有所帰蔵之時、所謂成之者性。在人則感而遂通者、誠之通。寂然不動者、誠之復。」（『朱子語類』巻九四）

「問、誠者、物之終始。看来凡物之生、必実有其理而生。及其終也、亦是此理合到那裏尽了。」（『朱子語類』巻六四）

(25)「凡天文在図籍昭昭可知者、経星常宿中外官凡百一十八名、積数七百八十三星、皆有州国官宮物類之象。其伏見・蚤晩・邪正・存亡・虚実・闊陿・及五星所行・合散・犯守・陵歴・闘食・彗孛・飛流・日月薄食・暈適・背穴・抱珥・虹蜺・迅雷・風祆・怪雲・変気、此皆陰陽之精、其本在地、而上発于天者也。」（『漢書』天文志）

(26)『史記』天官書の『正義』に「卿音慶」とある。

(27)「孫氏瑞応図曰、景星者、大星也。状如半月、生於晦朔、助月為明、王者不私人則見。」（『芸文類聚』巻一）

(28)「若煙非煙、若雲非雲、郁郁紛紛、蕭索輪囷、是謂卿雲。卿雲、喜気也。」（『史記』天官書）

(29)「天子孝則景雲見。」（『太平御覧』巻八七二）

(30)「天下太平、符瑞所以来至者、以為王者承統理、調和陰陽、陰陽和、万物序、休気充塞、故符瑞並臻、皆応徳而至。……徳至山陵、則景雲出、芝実茂、陵出黒丹、阜出蓮莆、山出器車、沢出神鼎。徳至淵泉、則黄龍見、醴泉湧、河出龍図、洛出亀書、江出大貝、海出明珠。」(『白虎通』封禅)

(31)『文選』については、以下、四部叢刊初編景宋刊本『文選六臣註』を用いる。

(32)「祅星彗孛之属也。」(『漢書』天官書、晋灼注)

(33)「霾、雨土也。」(『詩経』邶風・終風、毛伝)「孫炎曰、大風揚塵土従上下也。」(孔疏)

(34)「霧也。又氛亦同。不祥気也。」(続修四庫全書景明刊本『成化丁亥重刊改併五音類聚四声篇海』本書は、金の韓孝彦・韓道昭が編纂した字書『改併五音類聚四声篇海』(『五音篇海』)を、明の釈文儒らが刪補したもの。

(35)「礼緯」については未詳。同文が『史記』周本紀に見える。「夫国必依山川、山崩川竭、亡国之徴也。川竭必山崩。」

(36)「逮至衰世、……江、河、三川、絶而不流、夷羊在牧。」(『淮南子』本経訓)「夷羊、土神。殷之将亡、見於商郊牧野之地。」(高誘注)

(37)「独与天地精神往来而不敖倪於万物、不譴是非、以与世俗処。」(『荘子』天下)

(38)「肺主目、腎主鼻、胆主口、肝主耳、外為表而内為裏。開閉、張歛、各有経紀。故頭之円也象天、足之方象也象地。天有四時・五行・九解・三百六十六日。人亦有四支・五臓・九竅・三百六十六節。天有風雨寒暑、人亦有取与喜怒。故胆為雲、肺為気、肝為風、腎為雨、脾為雷、以与天地相参也。而心為之主。」(『淮南子』精神訓)

(39)「審死生之分、別同異之跡、節動静之機、以反其性命之宗、所以使人愛養其精神、撫静其魂魄、不以物易己、而堅守虚無之宅者也。」(『淮南子』要略)

(40)『説苑』からの引用としては不詳。同文が『関尹子』二柱篇に見える。「心応棄、肝応榆、我通天地、将陰夢水、将晴夢火、天地通我。」

(41)「目有光、月有明。三年不目日、視必盲。三年不目月、精必矇。熒魂曠枯、糟莩曠沈。」(『揚子法言』修身)以下、四庫全書所収『法言集註』を用いる。

(42)「宗元曰、熒、明也。熒魂司目之用者也。糟当為精。莩如葭莩之莩、目精之表也。言魂之熒明曠久則枯、精之軽浮曠久則沈、不目日月、目之用廃矣。以至於索塗冥行而已矣。」(『法言集註』修身)「葭莩(かふ)」とは、葦の茎の中にある薄い膜。転じて大変軽く薄いことを指す。

(43)「秘曰、熒、光。熒魂、神光。精莩、精之白也。故本精作糟、柳宗元云、糟当為精。言盲矇之患。神光久曠則枯、目精久曠則沈。於是以杖擿地而求路冥冥然行矣。」(『法言集註』

修身）

（44）「夫大塊載我以形、労我以生、佚我以老、息我以死。故善吾生者、乃所以善吾死也。今大冶鋳金、金踊躍曰我且必為鏌鋣、大冶必以為不祥之金。今一犯人之形、而曰人耳人耳、夫造化者必以為不祥之人。今一以天地為大鑪、以造化為大冶、悪乎往而不可哉。成然寐、蘧然覚。」（『荘子』大宗師）

（45）「寤寐者、心之動静也。有思無思者、又動中之動静也。有夢無夢者、又静中之動静也。但寤陽而寐陰、寤清而寐濁、寤有主而寐無主、故寂然感通之妙、必於寤而言之。」（『朱子語類』巻百四十）

（46）『大学章句』第一章「欲修其身者、先正其心」朱注に「心者、身之所主也」とある。「寂然感通」については、『易』繫辞伝上に「寂然不動、感而遂通天下之故」とある。また、「陳厚之問、寂然不動、感而遂通。曰、寂然是体、感是用。当其寂然時、理固在此、必感而後発。」（『朱子語類』巻七五）、「心一也、有指体而言者〔寂然不動是也〕、有指用而言者〔感而遂通天下之故是也〕、惟観其所見如何耳。」（『二程集』所収『河南程氏文集』巻九「与呂大臨論中書」、〔　〕内は朱子注）を参照。

（47）「某思、此竊謂人生具有陰陽之気。神発於陽、魄根於陰。心也者、則麗陰陽、而乗其気、無間於動静、即神之所会而為魄之主也。昼則陰伏蔵而陽用事、陽主動、故神運魄随而為寤。夜則陽伏蔵而陰用事、陰主静、故魄定神蟄而為寐。神之運、故虚霊知覚之体顕然呈露、有苗裔之可尋、如一陽復、後万核之有春意焉。此心之寂感所以為妙、而於寤也為有主。神之蟄、故虚霊知覚之体沈然潜隠、悄無蹤跡、如純坤月、万核之生性、不可窺其睨焉。此心之寂感所以不若寤之妙、而於寐也為無主。」（陳淳『北溪大全集』巻六「詳寤寐動静」）

（48）「哀公曰、何謂才全。仲尼曰、死生存亡、窮達貧富、賢与不肖、毀誉、飢渇、寒暑、是事之変、命之行也。日夜相代乎前、而知不能規乎其始者也。」（『荘子』徳充符）

（49）「皆謂語辞不為義也。」（『爾雅』釈詁「疇、孰、誰也」邢昺疏）、「誰昔、昔也。」（『詩経』陳風・墓門「誰昔然矣」鄭箋）、「誰、発語辞。」（『爾雅』釈訓「誰昔、昔也」郭璞注）

（50）「夫命行事変、不舍昼夜、推之不去、留之不停。故才全者、随所遇而任之。」（郭象注）